二十一世紀への人間と哲学

新しい人間像を求めて

上

池田大作

SEARCH FOR A NEW HUMANITY

J・デルボラフ

河出書房新社

二十一世紀への人間と哲学

新しい人間像を求めて

上

池田大作
J・デルボラフ

SEARCH FOR A NEW HUMANITY

河出書房新社

Auf der Suche nach einer neuen Humanität
by
Daisaku Ikeda and Josef Derbolav
German edition © Nymphenburger, München 1988

池田大作（いけだ だいさく）
一九二八年一月二日、東京生まれ。創価学会名誉会長、創価学会インタナショナル（SGI）会長。国連平和賞受賞。桂冠詩人の称号。著書に『人間革命』（現一〇巻）、『二十一世紀への対話』（A・トインビーとの対話）、『「平和」と「人生」と「哲学」を語る』（H・A・キッシンジャーとの対話）、『私の人間学』など多数。

ヨーゼフ・デルボラフ（Josef Derbolav）
一九一二年、ウィーン生まれ。ウィーン大学でドイツ語学・文学、古典文献学、哲学、教育学、心理学を修め、一九五五年、ボン大学の哲学および教育学の正教授となる。西ドイツ教育学界では、教育哲学の中心的存在であった。アメリカ、ソ連、日本でも客員教授をつとめ、著書、論文多数。一九八七年没。

二十一世紀への人間と哲学 上

池田大作／J・デルボラフ

一九八九年四月二五日　初版発行
一九九〇年一月十二日　五版発行

河出書房新社
発行者　清水　勝
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
TEL（四〇四）一二〇一（営業）
（四〇四）八六一一（編集）
振替（東京）〇―一〇八〇二

印刷　三松堂印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社

装幀　渋川育由

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯に表示してあります

©1989 Printed in Japan
ISBN4-309-23008-3

序　文

私たち二人は、日本とドイツでの出会いを通じて、すでに発刊されている「トインビー・池田対談」、「ユイグ・池田対談」、「ペッチェイ・池田対談」、「ウィルソン・池田対談」と同じ対談の形をとりながら、東西両文化の間に橋を架けるべく、共に対話を重ねていこうという決意に至りました。東京での出会いが実現した一九八二年十一月に、こうした考えが具体化され、私たちの対談の主題を決めることができました。

対談の流れとして、まず、「日独両国の歴史的関係」に端を発し、そこから徐々に、より根本的な問題に入ります。「伝統的生活の近代化」がその問題の最初であり、次に「西洋と東洋のヒューマニズム」、第三番目に「倫理と宗教の役割」を取り上げ、「仏教とキリスト教」という問題で頂点に達する構成になっております。最後に、現代の危機的状況を多元的に分析しながら、その基礎の上に未来を展望しようとしていますが、この最終章の前に、人類の将来を考えるための前提としての「教育」を扱うべく、一章を設けました。

最初の、相互理解を深めるための対話を終えてからは、対談を口頭ではなしに、書面で進めました。そのさい、東洋文化の代弁者としての日本側の対談者（池田）が、各章の主題及びそこから派生する問題点の解説を担当し、西洋文化を代弁する役になっているドイツ側の対談者（デルボラフ）は、主題を体系的に解明する任にあたりました。そのつど残された問題については、再度、共に検討を加え、一応の結論を出しております。私たち著者としては、論旨が明確となるよう心掛けましたが、追究している問題が余りにも多く、広範囲に及び、また、複雑であるという事情から、必ずしも理解しやすくはなっていないかもしれません。

私たちは、東西両文化圏を眺望できる専門家ではありませんし、また、すべての点で見解が一致しているわけでもありません。しかしなお、共通の精神的基盤は十分広いはずであるし、したがって、確実な成果を導き出せたものと思っております。さらにまた、ここに取り上げた諸問題は、たんに興味深いばかりでなく、時代の要請する緊急問題であるという確信に立ち、その解決に少しでも貢献できればと希望しております。

「新しい人間像を求めて」という本書の原題は多分にあつかましく聞こえるかもしれませんが、少なくとも私たちの問題提起の方向を示しています。容易に察せられるように、この題名はマルセル・プルースト（注・フランスの小説家。一八七一～一九二二）の有名な小説の題名「失われた時を求めて」に倣っておりますが、しかし、その求める方向は違います。つまり、以前の、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

追想すべき出来事ではなく、今後われわれの身に降りかかってくるとともに、克服すべき問題が、私たちの主題なのです。

ただし、対談の全体を通して、若干の結論を除くと、「新しい人間像」に関する展開がほとんどないことは奇妙に思われるかもしれません。その理由は単純です。つまり、たんに「求められる」べきものとしての人間像（人間性）というものは、取り囲み、詰めていくことはできても、直接取り扱える問題ではないからです。ヒューマニズムに関する章でも、人間性の新しい形態ではなく、むしろ、部分的にすでに陳腐化してしまった古い諸形態に言及しており、未来については、当然、おぼろげなままです。われわれの全技術政策的発展が世界的に置かれている進化への圧力や、われわれの生活条件が進歩し洗練される急激な速度、また、それにともなって起こる疑問などを前にして、次の百年といわず、五十年、否、次の十年でさえ信頼できる予想などはできないのです。

未来学を志す人は多いが、現実の急速な進展に、むしろ驚くことすらあるようです。私たちの対談の中での状況分析では、部分的ながら、警戒を促す結果が出ていますが、それを先取りしないでも次のことだけは言えると思います。つまり、われわれは今日、進歩が人類を滅亡へ導くという初めての体験を目前にしています。人類の技術的過剰効果が自分の足元をすくってしまうことになりかねないのです。自然界の種族が死に絶えることは、生物学者にとって何も

目新しいことではありませんし、われわれの天体の外の仮想の観測者にとっては、「ホモ・サピエンス」という種の没落と自滅も驚くべきことではないかもしれません。

人類が未来へ向かって存続しようとすれば、まもなく終わろうとする二十世紀において、ますます大きくなっている諸問題に対して、一つの解答を見いださねばならないことは自明の理です。その解答というのは、私たち共著者が信じているように、未だ知られていない「新しい人間像」の確立にのみにあるはずです。したがって、私たちは、「新たな人間像への途上にて」とか、「その途上にある」とかいう名称を選ばず、むしろ、「求めて」という言葉のもつ弁証法を恃んだわけです。この弁証法は最初、プラトン(注・古代ギリシャの哲学者。前四二七ごろ～前三四七ごろ)が発見し、のちに、アウグスティヌス(注・初期キリスト教会の指導者。神学者。哲学者。三五四～四三〇)が神への求道に転用しました。またその意味では東洋の伝統においても、「菩提(悟り)を求める人」すなわち菩薩として存在しています。悟りに到達した人を「仏」といい、その仏の悟りの境界に至る道が法華経に示されています。

求める者は、求めているものが未だないことを知っていますが、本来何を求めているのかを知っています。つまり、少なくとも、その根本的傾向というものを先取りしているわけです。ゆえに、アウグスティヌスは、求めている自分の神への関係を、「もし私が汝をすでに見つけていなかったのであれば、汝を捜し求めることはしなかった」と書いているのです。仏教にお

いては日蓮大聖人が「末法の凡夫出生して法華経を信ずるは人界に仏界を具足する故なり」と述べています。私たちも、要求されている解答らしい何かをすでに知っておりますし、あるいは、少なくとも形式的にその輪郭を描くことはできます。

ただ、しっかりした専門知識と懸命な責任感、また、強固な自制心をもってのみ、将来に待ち受けるものをこなすことができるのではないかと思います。たしかに、われわれは、未来を自分で形成していくわけですが、時折、軽率にも成り行きに任せてしまいます。自分の作り出したものは、たいてい、硬直した事象構造としてわれわれに返ってきて、それがわれわれの将来に――ちょうど良い具合にはいきませんが――運命の刻印を押すことになるのです。この「新しい人間性」の形態は一つの内面的革命を前提とします。そして、その革命は、利己主義や商業主義、また、イデオロギーといったものに支配されるうわべだけの行動規範を克服するとともに、東西両洋の文化的伝統と、その核心である仏教とキリスト教という宗教の、正当で深い要請に向けてわれわれが解放されるような、急激な精神性の変遷を意味しています。本書の題名の解釈にさいしては、このことを常に考慮していただきたいと思います。

最後に、この対談の進行・翻訳のためにご尽力いただいたリチャード・ゲージ氏、エルケ・ヤルヌート博士、桐村泰次氏、松戸行雄氏に心からの謝意を表します。

一九八七年六月

ヨーゼフ・デルボラフ
池田大作

追記

この対談が完結して原稿の最終整理段階にあった一九八七年七月十四日、デルボラフ教授の突然の訃報に接しました。

教授はそれに先立つ一か月ほど前から体調を崩され、ボンの病院に入院しておられましたが、病床にあってもなおこの対談集の原稿を離さず、いつも目を通しておられたと伺いました。その後、愛嬢のエルケ・ヤルヌート博士が最終原稿を検討し完成してくださり、翌一九八八年三月、ドイツ語版『*Auf der Suche nach einer Humanitaet*』がニンフェンバーガー社から発刊されました。

そしてさらに、このほど、英語版『*Search for a New Humanity*』とともに日本語版が上梓

されることは、亡きデルボラフ教授も、なによりの餞(はなむけ)として喜んでおられると信じています。

なお、日本語版の題名については、本対談のテーマを踏まえ『二十一世紀への人間と哲学』と改題いたしました。

一九八八年九月

教授の御冥福を衷心より祈りつつ

池田大作

目次

序文 1

第一章 日独両国の歴史的関係 15

1 日独両国の共通点 15

2 勤労の倫理 27

3 教育と学問 36

4 ドイツ帝国と日本 43

5 ワイマール体制の崩壊 49

6 分割と統一 57

第二章 伝統的生活の近代化 60

1 近代化への反動 60

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2　日本は何をなすべきか　70
3　自然の保護　76
4　家族制度の崩壊　82
5　地域共同体の復興　96
6　「ストレス」への対処　101

第三章　西洋と東洋のヒューマニズム　108
1　西欧ヒューマニズムの背景　108
2　知性重視と生命尊重　122
3　ヒューマニズムの本質と形態　128
4　人間の善悪両面性　145
5　生命世界の調和　152
6　「人間らしさ」の条件　162

第四章　倫理と宗教の役割　169

1　倫理規範の源流　169
2　倫理的行動の基盤　176
3　情念の抑圧と昇華　183
4　子供の教育　189
5　倫理と政治家　198
6　医師と倫理性　208
①安楽死の問題　②死の臨床をめぐって
③人工妊娠中絶をめぐって

第五章　仏教とキリスト教　218
1　仏教とキリスト教の共通点　218
2　愛と慈悲　231
3　仏教はキリスト教に影響を与えたか　242
（以下下巻）

下巻目次

第五章　仏教とキリスト教（つづき）
4　法か人格神か　5　ドイツ人と仏教研究　6　仏教とキリスト教の交流
第六章　教育問題
1　何が最も大切か　2　教育と政治権力　3　登校拒否の原因　4　校内暴力の風潮　5　青少年の非行　6　童話と性格形成
第七章　未来のための現在
1　環境破壊に対して——略奪される地球　2　さまざまな汚染物質　3　危険な火遊び　4　文化遺産の保存　5　生命工学の課題

二十一世紀への人間と哲学（上）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c